The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語直接話法における分離型と非分離型の差
Author(s)	木山, 直毅
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 93-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語直接話法における分離型と非分離型の差

木山　直毅 *

北九州市立大学

E-mail:　n-kiyama@kitakyu-u.ac.jp

あらまし　英語の直接話法には，主語（S），述語（V），引用内容（Q）の 3 つが必須の要素である。これらの要素を利用して英語は SVQ，QSV，QVS，QSVQ，QVSQ という 5 つの形式を駆使する。従来の研究では，QSV と QVS の交替現象に着目していたが，QSVQ や QVSQ のような Q が分離するような形式に関しては考察がなされてこなかった。そこで本研究では類像性の観点から Q の分離には機能的な違いがあることを論じる。

キーワード　英語直接話法，動詞クラス，品詞タグ，類像性

The suspended and non-suspended forms in the English direct speech

Naoki KIYAMA

Wakayama University

Abstract English direct speeches require, at least, three different grammatical elements, subject (S), verb (V), and the quoted messages (Q). English makes the most of these components, and makes up five different constructional patterns, namely, SVQ, QVS, QSV, QSVQ, and QVSQ. Previous studies have paid much attention to the subject-verb alternation, namely QSV and QVS, but none of them make a clear distinction between the suspended and non-suspended quote forms, QSVQ and QSV. In this study, I would like to argue that the two forms prefer two different verb-subclasses, and consequently, the suspended and non-suspended forms have different functional use.

Keywords　English Direct Speeches, Verb class, Part-of-speech tags, Iconicity

1.　はじめに

英語の直接話法に必須な文法要素として，主語（S），述語（V），そして二重引用符内の引用内容（Q）の 3 つが挙げられる。そして英語では，これら 3 つの要素を駆使して 5 つのパターンの直接話法を作り出す。以下に各パターンの例を挙げる。

(1)　a.　Sherlock Holmes said “My dear fellow,”　(*The Adventures Of Sherlock Holmes*)

0　本研究は統計数理研究所合同研究会「言語と統計 2017」の報告書に加筆修正を加えたものである。本研究を進めるにあたって多くの方々からご助言をいただいた。特に本プロジェクトの主要メンバーである田畑智司先生（大阪大学），岩根久先生（大阪大学），三宅真紀先生（大阪大学）には研究会で様々なご指導をいただいた。また，本研究の前段階として大阪認知言語学研究会での早瀬尚子先生（大阪大学）と小薬哲哉先生（大阪大学）との議論が本研究の下地になっている。ご指導して下さった先生方に深く感謝申し上げる。当然のことながら，本稿の不足や誤りは，言うまでもなく執筆者の責任である。

b. “My dear fellow,” Sherlock Holmes said . . .

c. we have at least an hour before us,” he remarked, “for they can hardly take any steps until the good pawnbroker is safely in bed . . .” (*The Red Headed League*)

d. “My dear fellow,” said Sherlock Holm . . .

e. “you will be glad to hear,” said Holmes, “that your young master is found . . . (*The Adventure of the Prior School*)

まず，（1a）は，SVQ は現代英語の語順としては最も基本となる形式である。次に，（1b）と（1c）は QSV となっており，引用内容が前置された例である。（1d）と（1e）は QVS と，引用内容が前置されるだけでなく主語と動詞の位置が現代英語の基本的な語順と逆転した特殊な例である。また，（1c）と（1e）の差異は引用部である Q が前半と後半に分離されているという違いがある。

直接話法に関する先行研究は理論言語学では多くなく，また，先行研究における現象の扱いはとても狭く，恣意的に扱うデータを制限しているため，決して研究が進んでいるとは言えない表現である。そこで本研究は，先行研究が暗黙のうちに同一視している（1c）と（1e）の引用部が分離する表現（分離型）と（1b）と（1d）の分離しない形式（非分離型）の間に違いがあるのかどうか，もし違いがあるならばどのような違いがあるのかを考察する。

2. 直接話法の統語・意味的特徴

既に（1）で見たように，英語の直接話法には，5 つの統語パターンが観察される。本節では，それらの 5 パターンに共通して見られる統語的特徴と意味的特徴を概観する。

2.1. 統語的特徴

英語において，最も基本となる語順は，主語の次に述語，そして目的語や補文を取るというものである。ところが，直接話法は「主語」と「述語」が倒置を起こしていたり，一見すると補文のようになっている引用句が前置されたりと，英語の一般的特徴を有していない。[1] そのため，果たして「主語」に見える要素が本当に主語として扱うべきなのか，「述語」に見えるものが述語として機能しているのかなどを，Collins (1997) が使用しているテストに沿って確認する。

まず，（2）において，*Holmes* が主語として機能していることを確認する。もしも *Holmes* が主語の役割を担うのであれば，*Holmes* は述語 *say* と一致関係を見せるはずである。そして（3a）が示すように，三単現の *s* が欠落した場合は非文となる。そのため，英語の主語が持つ文法的な役割を果たしていると言える。次に，倒置を起こしたとき *Holmes* は動詞の直後に置かれるため，目的語である可能性が生じる。そのため，もし *Holmes* が目的語であるならば *he* ではなく *him* で置き換えできるはずである。しかし，（3）が示すように，*him* ではなく *he* が容認される。つまり *Holmes* は主格であるということになる。

[1] スウェーデン語やノルウェー語，アイスランド語などのゲルマン語族の場合，QVS の形式が本来の語順であるため，英語においても QVS が本来の形式で，QSV が倒置であるという方が自然であると思われる（大阪大学，南澤佑樹氏, p.c.）

(2) “My dear fellow,” says Holmes.

(3) a. * “My dear fellow,” say<u>ø</u> Holmes.

b. “My dear fellow,” says {*him/he}.

(3）の文法的振る舞いから，*Holmes* は直接話法における主語である。また表 1 は British National Corpus（以下，BNC）から収集した直接話法に使用される動詞を頻度順に並べたものであるが，動詞が *say* 及び，それに関連する動詞が大部分を占めるため，*Holmes* は行為者であるとみなすことができる。この事実を踏まえ，英語の直接話法は（4）のように一般化することができる。以後，本稿では各形式を区別する際，（4）の表記を用いる。

(4) a. S V Q: Holmes says, “my dear . . .”

b. Q S V: “my dear . . .” Holmes says

c. Q V S: “my dear . . .” says Holmes

d. Q S V Q: “my dear . . .” Holmes says “. . .”

e. Q V S Q: “my dear . . .” says Holmes “. . .”

表 1: 直接話法に生起する高頻度語 100 語

1-20 位	頻度	21-40 位	頻度	41-60 位	頻度	61-80 位	頻度	81-100 位	頻度
say	45102	remark	264	warn	152	put	78	assert	52
ask	2504	recall	263	assure	137	muse	77	snort	52
reply	1756	observe	253	hiss	127	persist	76	moan	52
tell	966	begin	247	yell	120	argue	75	return	51
explain	893	protest	220	conclude	116	urge	75	confirm	51
add	731	come	209	remind	116	inform	74	wail	50
continue	683	call	206	state	112	advise	73	grumble	49
cry	551	laugh	205	enquire	106	correct	69	groan	48
write	529	exclaim	201	order	102	remember	69	joke	48
agree	470	think	200	complain	100	promise	68	read	48
shout	468	repeat	198	growl	93	grunt	65	bark	46
murmur	463	declare	197	mumble	93	plead	65	sneer	46
answer	449	demand	196	offer	92	drawl	63	interject	46
whisper	444	smile	192	confess	91	grin	63	counter	45
mutter	338	insist	187	gasp	90	snarl	61	roar	45
go	331	interrupt	181	nod	89	cut	58	note	42
admit	328	retort	181	scream	87	echo	58	shrug	42
snap	316	sigh	172	respond	84	claim	57	object	41
suggest	288	announce	163	concede	83	report	56	reflect	41
comment	268	point	161	breathe	82	lie	54	interpose	39

2.2.　意味的特徴：フレーム意味論の観点から

前節では，主語と述語の文法関係を概観したが，次に意味的観点をフレーム意味論 (e.g. Fillmore, 1976, 1977, 1982; Fillmore and Atkins, 1992) の観点から考察したい。まず，前節で論じたように，(2) の *Holmes* は *says* の主語であるということから行為者であり発話者であることは明らかである。そのため，主語は発信者（ADDRESSER）であると言え，引用句は発信者が述べたものであるため，内容（MESSAGE）である。また，(5) の *to Dr. Watson* が示すように，直接話法は受信者（ADDRESSEE）も省略可能ではあるが必要な要素である。

(5)　a.　Sherlock Holmes said “My dear fellow,” (to Dr. Watson)

　　b.　“My dear fellow,” Sherlock Holmes said (to Dr. Watson)

　　c.　“My dear fellow,” said Sherlock Holm (to Dr. Watson)

直接話法が他の構文と一線を画す最大の特徴として，語り手（NARRATOR）の存在である。直接話法は一般的に小説などで用いられるため，直接話法全体を述べている語り手が必要不可欠な要素であるといえる。しかし一部の特殊な例を除いて，語り手は文法要素として現れることは原則としてない。

以上のことから，本稿では直接話法全てに当てはまる意味特徴として図 1 のような QUOTE フレームを提案する。図 1 では，発話事態の中に発信者（AR）と受信者（AE），そして発話の内容（M）があり，そしてその伝達事態を読み手に伝える語り手（N）が発話事態の外にいることを図式化している。本研究で対象としている直接話法（=（4））の全てが図 1 に挙げたフレームを共有していることから，各要素を異なる形式で表す異構文（allostruction）とみなすことができる (Cappelle, 2006)。

3.　先行研究とそれらの問題点

これまで理論言語学において直接話法はあまりなされてこなかった。しかし，その中でも生成文法の枠組みから直接話法を分析した研究がいくつか知られている。生成文法の研究では，可能な限り意味の干渉を排除し，構造の違いで以って形式の差を説明する。そのため，直接話法の形式の違いは生成文法が仮定する構造の違いであるということになる。本稿は，生成文法の枠組みを採用するわけではないため，生成文法の説明原理を詳細に見ることはせず，言語現象という観点から問題点を指摘したい。

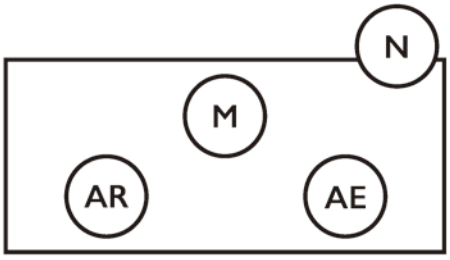

図 1: Quote フレーム

生成文法の先行研究としてはCollins (1997); Gyoda (1999) といった研究が挙げられる。彼らの研究が扱っている現象は全てQSVとQVSの語順交替に関する問題であり，分離型と非分離型の違いについては，形式の違いに関しては認識しているものの，非分離型に関しては一切の分析がなされていない。例えばGyoda (1999) の引用を見てみたい。

(6) a. i. S V “Q.”
ii. “Q,” S V “Q.”
iii. “Q,” V S “Q.”
b. All of these examples . . . can be called direct speech. However, (i) cannot be called QC[Quotative Construction], on account of the fact that the quote is not located in sentence-initial position. (Gyoda, 1999, 275)

GyodaによるとSVQの形式はQが前置されていないという理由で直接話法とはみなさないと述べているものの，なぜ前置されていないという理由で分析から除外する必要があるのかということについては何も論じられていない。また，Qが前置されているかどうかで分析対象とするか否かを決めるとするならば，分離型に関しては分析対象とするべきである。しかし，Gyodaの論文において分離型と非分離型の違いについて論じた箇所はなく，QSVとQSVQ，QVSとQVSQの違いを重要視していない。

以上のような問題点をもとに，本研究は先行研究において暗黙のうちに避けられていた分離型と非分離型について焦点を当て，分離型と非分離型の間にある形式上の違いは，先行研究のように取るに足らないものなのか，それともその間には何らかの違いが見られるのかということについて，コーパスを用いた計量的な研究によって検証する。本研究における作業仮説は次の通りである。

H_0 引用句が中断された形式と中断されていない形式の間に重要な差異は見られない。

4. 直接話法における類像性

本節では，3節で得られた仮説を2つの観点から検証する。まず3.1節では本研究が用いるデータに関して概観し，3.2節では動詞クラスの観点から，3.3節では品詞の観点から分離型と非分離型の間には類像性（iconicity）という点で差異が見られることを論じる。

4.1. 直接話法におけるデータ取得

本研究においては，コーパスデータに基づく計量的な分析を行い，分離型と非分離型の間に違いは見られるのかということを検証する。そのため本節では本研究がどのようなデータを用い，そのデータ数について概観する。

本研究は分離型と非分離型を比較することにある。そのため，（4b）から（4d）に挙げた形式をBritish National Corpus（以下，BNC）から取得した。表2はBNCから得られた各形式の総数である。

以下の節では，本節で紹介したデータを利用し，2つの観点から分離型と非分離型に違いがあるかどうかを数量的な面から検証していく。

表 2: BNC から得られた各形式のデータ数

	QVSQ	QVS	QSVQ	QSV
総データ数	5261	35260	4942	20488

4.2. 分離型と非分離型における動詞クラス

本節ではまず直接話法に出現する動詞クラスに違いがあるかどうかを本節で確認する。動詞の出現に違いがあるかどうかを確認するために，表 3 のような各形式に出現するレマ化した動詞の頻度表を作成し，上位 200 語を用いて対応分析にかけた。その結果が図 2 と図 3 である。まず，各形式の散布図（図 2）を見ると，1 軸において正の方向に QSV，QSVQ が，負の方向に QVS，QVSQ が分布している。ただし，QVS，QVSQ に関しては極めて原点に近い分布を示していることから，動詞のみで分類をすることができないことを示唆している。

次に，動詞の散布図（図 3）を見てみると，語彙的にはバラつきが見られるが，動詞クラスという点で一定の傾向が見られた。図 4 は図 3 の 1 軸の値を Levin (1993) の動詞クラスに基いて動詞を分類し，箱ひげ図として描画したものである（Levin (1993) に収録されていない動詞は Berkeley FrameNet Project (Baker et al., 1998) を参照した）。図 4 の箱ひげ図からわかることとして，COMMUNICATION_RESPONSE や BEGIN_VERBS，ADVISE_VERBS，そして HINDERING_VERBS という動詞クラスが正の値に強い傾向を示しているという点である。

表 3: 各形式における動詞の頻度表（一部）

	say	ask	reply	tell	explain	add	continue	cry	write	agree
QSV	11152	20	873	865	307	250	204	47	79	236
QVS	24879	2251	549	1	365	296	120	432	140	176
QSVQ	2450	62	169	100	115	85	245	12	95	35
QVSQ	3899	52	77	0	59	39	67	38	120	19

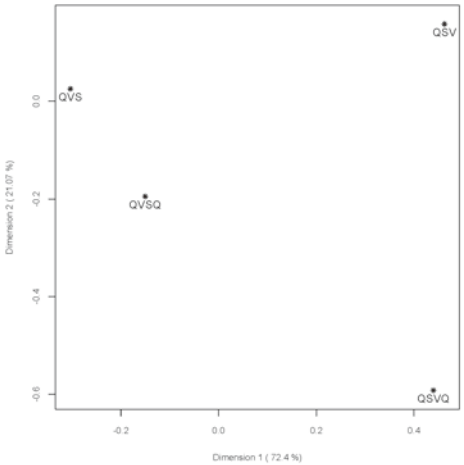

図 2: 構文間の対応分析

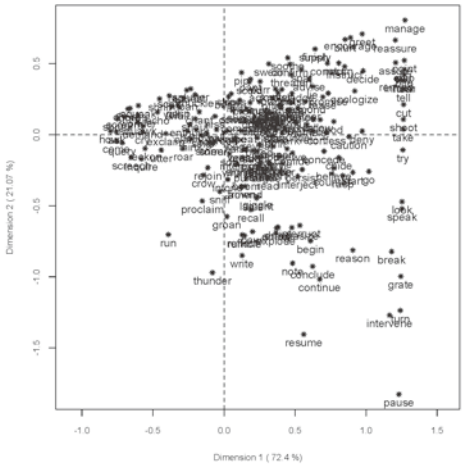

図 3: 語彙の散布図

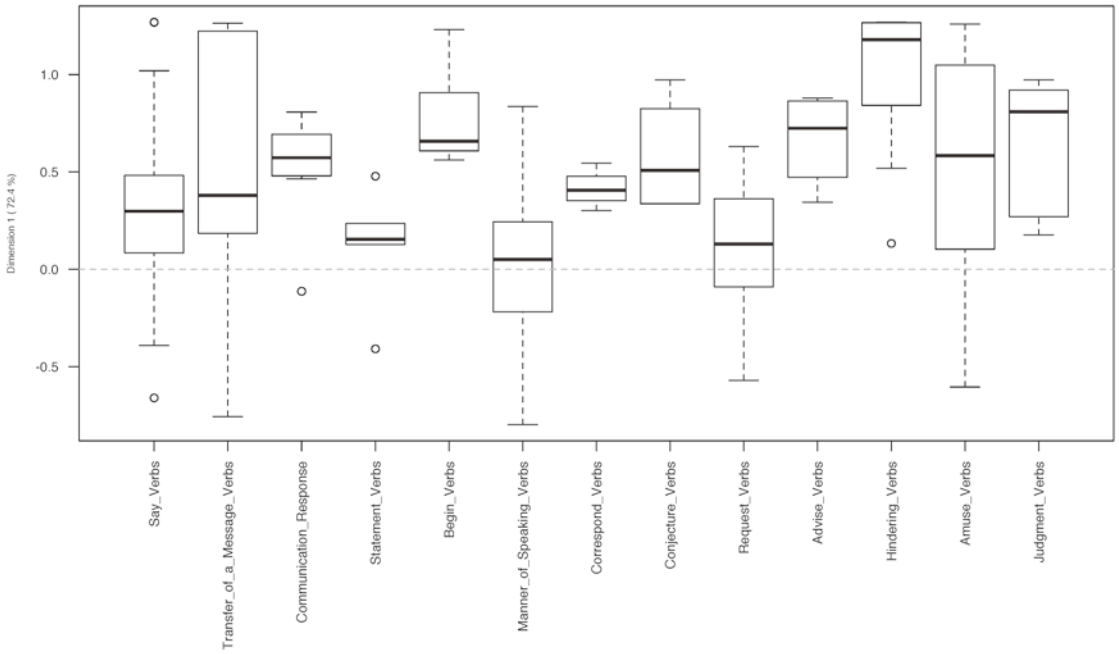

図 4: 対応分析の第 1 軸を箱ひげ図で描画

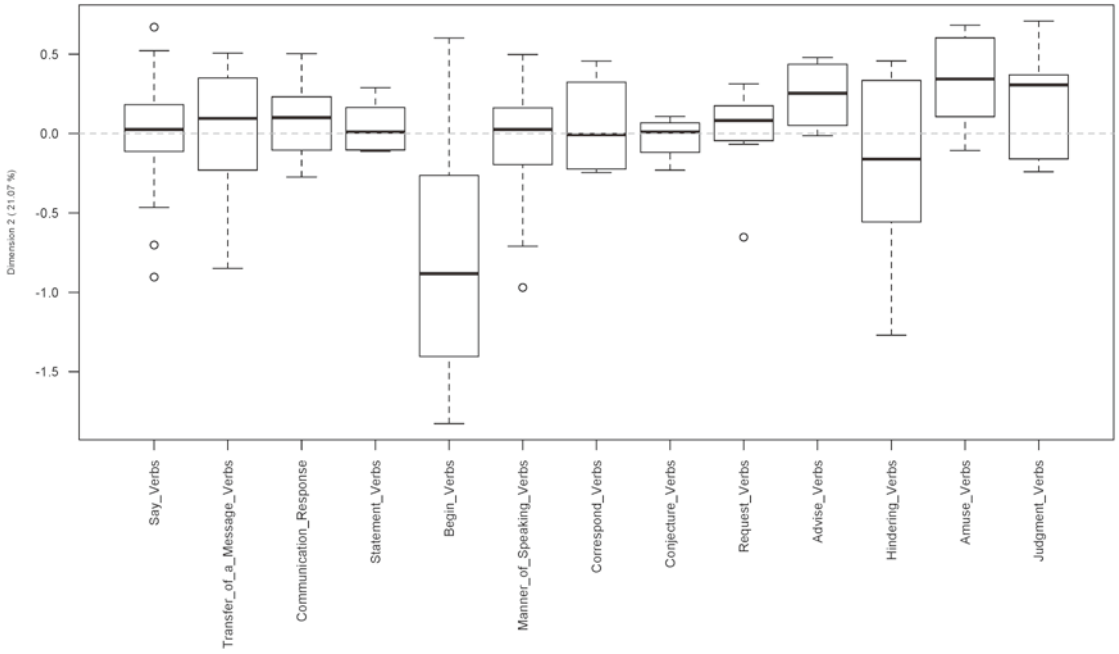

図 5: 対応分析の第 2 軸を箱ひげ図で描画

しかし本研究が対象とする分離型と非分離型は対応分析の結果によると 2 軸によって大きく分かれているため，2 軸の値を箱ひげ図で表す必要がある。その結果が図 5 である。図 5 で得られる知見は，2 軸においては BEGIN 動詞が比較的幅広い分布を示しているが，値としては-0.5 から-1.5 の間の値を全体的に示していることから，QSVQ の形式に多く見られる傾向

があると言える。

これまでの統計的な検証から，QSVQ と QSV の形式選択における絶対的な基準とは言えないが，動詞クラスの出現が形式の選択に一定の程度関わっているということが示唆され，また中断された形式と中断されていない形式においても使用される動詞クラスに差異が見られるということが分かった。

では，なぜ QSVQ に BEGIN 動詞が最も多く現れているのか。ここからは BEGIN 動詞が分離型に多く現れている理由を質的に考察したい。Levin (1993) が BEGIN 動詞として分類している動詞において，本研究で使用されていた語彙は *continue*，*begin*，*finish*，*resume*，*start*，そして *pause* であった。それらの対応分析の値の 1–3 次元目を表 4 に挙げる。図 3 の 1 軸と 2 軸に対応する分析の結果は Dim 1 と Dim 2 である。この値を見ると，BEGIN 動詞の全てが負の値，即ち分離型に偏っているわけではなく，*finish* のみが非分離型に顕著な値を見せていることが分かる。

表 4 における分布の違いに関する具体的な考察に入る前に，類像性（iconicity）という概念を紹介する (e.g., Croft, 2003; Haiman, 1983; Haspelmath, 2008)。類像性とは，（7）の引用にあるように日常の経験が言語形式に影響を与えているという仮説を指し示す。

(7) “[T]he structure of language reflects in some way the structure of experience (Croft, 2003, 102).”

類像性の 1 つの例として，オノマトペの反復と語末促音形式の対比があげられる。例えば，「ピカピカ」のように語幹（「ピカ」）を反復させることで，光が 2 度以上光ったことを表すが，「ピカッ」と語末を促音にすることで 1 度だけの光，それも瞬間的なものを表す。類像性とは，このような経験が言語形式に何らかの形で影響を与えているという仮説を指す。

以上で見た概念を踏まえ，表 4 の分布と類像性がどのような関係性を持つのかを考察する。QSVQ の形式に多く現れている動詞は *continue*，*resume*，そして *pause* であった。まず，最も明快なものとして *pause* の例をいくつか見てみたい。（8a）の例は，*pause* を修飾している語として *dramatically* が用いられている。即ち，引用部が途中で途切れることによって，現実世界においても発話が中断されたことを意味していると言える。同様に，（8b）も修飾句として *for a judicious few seconds* とあることから，*well* と述べた後に実際に発話を中断させていることがわかる。

表 4: BEGIN 動詞の頻度表（1 万語あたり）

	Dim 1	Dim 2	Dim 3
continue	0.67	-1.02	-0.12
begin	0.61	-0.75	-0.09
finish	0.64	0.60	-0.04
pause	1.23	-1.83	-0.71
resume	0.56	-1.40	0.32
start	0.91	-0.26	-0.27

(8) a. “. . .Cheque book journalism has been pointed at Madge but luckily she’s weathered the storm or else,” Dame Edna paused dramatically, “she’d be back on the streets.” (ARJ 1562)

b. “Well,” Cooper-Key paused for a judicious few seconds, “if you insist.” (ADB 689)

しかし，（8）の例だけでは，動詞の修飾語および句が後続する，つまり動詞句が情報構造の点で「重たい」という理由で QSVQ の形式になっている可能性が否定できない。そこで，修飾語などが後続しない例を（9）に挙げる。これらもやはり *paused* と引用句の間に入れていることから，実際に発話を中断させていると言っても良いだろう。尚，QSVQ の形式において，*pause* が使用された例は 11 件あるが，修飾語や修飾句が後続するのは（8）の 2 件のみで，他はすべて（9）のような例である。

(9) a. “One, two, three, four,” Mick paused, “five, six. . . .” (AT3 1600)

b. “. . . And,” Rose paused, “it dissolves easy as anything in alcohol. . . . (H8A 2436)

c. “. . .Now,” Rose paused, “the coffee and the alcohol. . . .” (H8A 2648)

d. “Yes,” Skinner paused, “what did she want? . . .” (ALJ 442)

e. “. . .By the way –” Helen paused, “– she has been gathering some gossip that will probably interest you. (JYE 3473)

このことから，引用句をわざわざ中断させているというのは，一度発話が中断したという現実世界を言葉で表すために著者の意図が関わっており，（7）の類像性が関わっていると言える。

一度中断した行為を再開することを意味する *resume* も，上で見た *pause* と同様に類像性が関わっていると言える。（10）において *resume* を使うことによって，一度発話の中断を意味していることがわかる。例えば，（10）において，*however* や *but first* といった呼びかけや接続詞を一度述べることによって受信者の注意を引きつけている。そのため，注意を引くための一瞬の間を中断された形式によって筆者が表現していると考えられる。即ち，*resume* においても実際の経験が言語形式として関わっていると言えるのではないだろうか。

(10) a. “However,” Mrs Baggley resumed, “I rather wonder whether Charles wasn’t leaning very heavily indeed on Paul. . . .” (H8B 2573)

b. “But first,” Luke resumed, “before we get married, we’ve got some living to do, time to make up – hours, days, weeks to share. (A7 4346)

c. “However,” Mrs Baggley resumed, “I rather wonder whether Charles wasn’t leaning very heavily indeed on Paul. . . . (H8B 2573)

次に，*continue* に関して具体例を交えて考察したい。*continue* には様々な意味があるが，Oxford Dictionary of Synonyms and Antonyms を用いて類義語を調査すると，*resume* という

項目がある。そのため *continue* にも（10）で確認したような一度中断した行為を再開するという意味を表しており，*continue* を用いたときも，中断された形式は「行為の中断と再開」を類像性によって表わしていると考えられる。例えば，（11a）を見てみると，*we also know* と述べた後，深く息を吸うという行為によってベンジャミンのセリフが中断されたことを表わしていることがわかる。（11a）のように明示的に行為の中断を表す修飾語を伴う例として（11b）や（11c）である。（11b）の場合，一度 *Now I can speak of Callanish* と述べた後，一度発話をやめ，そして後続する引用句をゆっくりと述べていると言える。また（11c）においても，*secondly* と述べ，一度行為を止めた後，慌てて続きを述べていることがわかる。そのため，現実の世界で一度行為をやめた後，発話を続けるということを *continue* においても表しており，これまでと同様に類像性の観点から共通している。

(11) a. "We also know," Benjamin continued, breathing deeply to contain his anger, "that on the Wednesday after Falconer was killed, Abbe Gerard from the nearby village also died in mysterious circumstances. (HH5 2836)

b. "Now I can speak of Callanish," Minch continued more slowly, "where my ancestors flew and where once so long ago I cast my shadow down." (FP3 1158)

c. "Secondly," Santerre continued hastily, ignoring his wife's warning glance, "memories of the Templars still survive here. . . ." (H90 1116)

これまでの例と同じように，（11）の例はすべて修飾語及び修飾句が付随しているため，そういった付加詞のないものを次に挙げる。

(12) a. ". . . Promise me, Piper," Sid continued "You will not play those pipes in this orchard!" (A61 234)

b. "Now these assassins," Athelstan continued, "always give their victim fair warning. . . ." (K95 254)

c. "Master Taplow," Benjamin continued, "you were involved with the monk Hopkins, acting as his courier?" (H90 239)

分離型に多く現れる動詞の最後の語彙として *begin* と *start* を考察したい。（13a）において，*Sir John* と言うことで一度 John の注意を引いた上で，Athelstan は謝罪を入れている。（13b）も同様に，*well* と言った後に入る多少の間を表現するものである。（14）においても，発信者が最も伝えたい情報を 2 つ目の引用句で表現をするために，1 つ目の引用句によって注意を引き付け，引用句を中断させることで間をおく，即ち発信者の心理的な不安定性や振り返るという行為に伴って生じた時間差を表現していると言える。

(13) a. "Sir John," Athelstan began, "I apologise." (H98 2236)

b. "Well," the Doctor began, "first I've got your General Fakrid barking at me to find a way to polish off these eight twelves. . ." (FR0 879)

(14) a. "I do believe," Shill started unsteadily, "that our beloved Maria has committed suicide." (ANK 1359)

b. "The thing that ripped apart the Raistrick," Defries started to say, turning from the window towards Ace, "that was – oh shit . . ." (F9X 2542)

最後に，BEGIN 動詞において唯一，非分離型に偏って現れる動詞 *finish* が，なぜ非分離型に多い傾向があるのかを考察したい。これらの例から分かるように，分離型の時は呼びかけや *well* などのフィラーが多かったが，非分離型の場合は引用句が *he is here* や具体的に何を知ることができたのかという発信者の言いたいことを具体的に表しており，伝達内容を言い切っている。

(15) a. "– so, you see, he is here," Lee finished. (CA3 1136)

b. ". . .And discovered me rifling through mother's jewel box," Phena finished. (HGY 3010)

このような言い切りが *finish* の語彙的な意味と強く結びついていると言える。つまり *finish* は発話が終わらない限り，*finish* とは言えず，分離型の場合は伝達事態が完了していないため *finish* を使いにくいが，言い切ってしまっている非分離型は *finish* の語彙的アスペクトと相性が良いと考えられる。そのため，形式的に非分離型は言い切りを表すことができ，動詞 *finish* と類像性の観点から結びつきが強いと言える。

本節では，QSVQ の形式には，*pause* や *resume*，*continue* が多く現れていることを類像性という観点から考察した。QSVQ に多く現れるこれらの語彙は，「行為の中断」を常に表す動詞で，中断された 2 つの引用句の間にこれらの動詞を置くことで，現実世界において少しの間が置かれたことを明示化することが可能になる。一方で，非分離型はその形式的特徴から伝達内容を言い切っていることが多く，動詞 *finish* との相性が良いということを論じた。このような分析から，分離型と非分離型の形式的違いと，動詞が持つ意味は類像性という点で区別されており，3 節で挙げた仮説（H_0）を棄却する 1 つの根拠となる。

4.3. 分離型と非分離型における動詞の形式

前節では分離型と非分離型の違いに動詞クラスが持つ語彙的意味と各形式が持つ特徴が類像性によって結びついていることを論じた。本節では動詞の形式の観点から分離型と非分離型の違いにおいて類像性が関わることを議論する。

BNC では全ての語彙に対して品詞（POS タグ）が付与されている。そこで各形式に現れる動詞の品詞の調査をした。その結果が表 5 と表 8 である。表で用いられている記号は，それぞれ VVD が過去形を，VVZ は三単現の *s* を，VVN は過去分詞，VVB は複数形などに見られる動詞の原形を表わしている。表 5 と表 8 の数値に対し χ^2 検定の残差分析を行った結果は表 6 と表 9 に，検定の *p* 値は表 7 と表 10 に示されている。この結果から，SV 形式の場合は VVD と VVN は非分離型に，VVD と VVB は分離型に多い共通性が見られ，VS 形式の

場合はVVZが非分離型に多くVVDが分離型に多いことが分かる。即ち，SV型とVS型に共通して過去に関する表現は非分離型に，現在に関わる場合は分離型に有意に多く現れていることが分かる。

本節で得られた統計的な品詞の分布は前節と同様に類像性が関わっていると言える。前節で概観したように，分離型は実際の発話を中断していることを表す表現である。即ち，発話そのものは現在に行われているものである。例えば，次の例は，発信者が言いかけたことを中断し，その続きを言おうとしている例である。

(16) a. "Quite simply," Miles concludes, "frying itself is not a bad process to use but the deep-fat fryer has to be used correctly." (A7F 1285)

b. "In reporting a problem to the highway authority," the booklet advises, "you should give them as much information as possible about what is wrong . . ." (AR7 792)

c. "But," Rainbow continues, "you're something . . . different . . ." (HGN 3584)

(17) a. "When I trained," says Gumede, an ANC guerrilla, "they said that the liberal was more dangerous than the enemy." (HTH 2683)

b. "WELL," says Iman, ducking , "would you like to be photographed with a man wearing that colour jacket?" (J0W 1856)

c. "Come on you guys," exhorts Linda, our daredevil guide, "Let's get to the edge of the envelope." (ASS 1395)

一般的に，フィクションにおける現在形は歴史的現在と同様に，まるで現在起こっているかのような状況を描くことで臨場感を出すものと言われている (e.g. Quirk et al., 1985, 181)。また現在形によって未来のことを表すことも可能である。もちろん，分離型には過去形を使うことも可能であるが，分離型は前節で考察したように一度発話を中断し，発話の再開を表す

表 5: 各品詞の素頻度

	QSV	QSVQ
VVD	18742	4709
VVZ	1279	465
VVN	274	50
VVB	17	16

表 6: 品詞の χ^2値の調整残差

	QSV	QSVQ
VVD	5.60	-5.60
VVZ	-6.60	6.60
VVN	2.28	-2.28
VVB	-3.98	3.98

表 7: χ^2の p 値

	QSV	QSVQ
VVD	0.00	0.00
VVZ	0.00	0.00
VVN	0.02	0.02
VVB	0.00	0.00

表 8: 各品詞の素頻度

	QVS	QVSQ
VVD	31053	4333
VVZ	4149	765
VVB	57	9

表 9: 品詞の χ^2の調整残差

	QVS	QVSQ
VVD	6.55	-6.55
VVZ	-6.56	6.56
VVB	-0.24	0.24

表 10: χ^2の p 値

	QVS	QVSQ
VVD	0.00	0.00
VVZ	0.00	0.00
VVB	0.81	0.81

ため，この現実世界で生じる一連の行為を表現するのに現在形が適していると言える。そのため，分離型における動詞の時制が現実世界を反映しているもと言える。

一方で，非分離型においては過去を表す動作が多い。非分離型は前節で論じたように「言い切り」を表現することが可能である。そのため，引用部を前置させていることからも分かるように，引用部が文で完結することによって発話そのものは過去の出来事になる。たとえば，（18a）において，読者は引用部を Athelstan が言い切った後で *Athelstan announced* という情報を得る。即ち読者にとって Athelstan の発話は過去に行われた事象である。非分離型においても分離型と同様に現在形を使用することで臨場感を出すことも可能であるが，実際の経験，即ち世界の出来事の順序を的確に表現することができるのは過去形である。

(18) a. "Sir John has many problems to exhaust him," Athelstan announced. (K95 1825)

b. "Just another five minutes," Nick begged, not taking his eyes from the ball . . . (CE5 1923)

c. ". . ., and Cromb emptied the whole lot into his new pipe with Dad having a look of disbelief on his face," Kerr recounted. (CU0 1365)

(19) a. "A fine way to cheer people up!" retorted Ethel. (CB8 378)

b. "I see you're gettin' to understand my problem," whispered Tommy. (K8V 2522)

c. "Evans," interjected Dalziel when Edwards reached this part of his story. (B3J 2736)

このように，非分離型において過去形が多く用いられているのは分離型と同様に形式が持つ特徴が類像性と強く関わっていると言うことができ，分離型と非分離型を区別して考える必要があると言える。

本節では，各形式と動詞の品詞との間に有意味な関連性があることを示した。具体的には分離型においては現在時制を有意に多く用いる傾向がある一方で，非分離型は過去時制を多く用いる傾向があることが観察され，その理由としては前節で紹介した類像性が強く関わっていることを論じた。このことは，先行研究が重視してこなかった分離型と非分離型の間に見られる違いは機能的な面から異なっており，3 節で提示した仮説を棄却するもう 1 つの根拠となる。

5. まとめ

本研究では，英語の直接話法において，引用句が中断された形式とそうでない形式との間に差異が見られるのかどうかを探索的に考察した。従来の研究では，分離型の直接話法は暗黙のうちに深い考察がなされてこなかった。しかし，本研究から得られた計量的な知見から引用句が分離されるかどうかという統語的特徴が動詞クラスや動詞の品詞という点で振る舞いが異なっており，これは類像性という点で説明することが可能であることが強く示唆された。結果として，先行研究に基づく「分離型と非分離型の間には差はない」という帰無仮説を棄却する根拠が 2 つ得られた。

今後の研究課題として，各動詞クラスが各形式とどのような結びつきを見せるのか，SV と VS の交替がどのような環境によって引き起こされるのかといった要因を探っていくことが挙げられる。

参考文献

Baker, C. F., C. J. Fillmore, and J. B. Lowe (1998). The Berkeley FrameNet Project. *Proceedings of the 17th International Conference on Computational Linguistics 1*, 86–90.

Cappelle, B. (2006). Particle placement and the case for "allostructions". *Constructions 1*, 1–28.

Collins, C. (1997). *Local Economy*. Cambridge, MA: MIT Press.

Croft, W. (2003). *Typology and Universals* (2 ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, C. J. (1976). Frame semantics and the nature of language. *Annals of the New York Academy of Sciences: Conference on the Origin and Development of Language and Speech 280*, 20–32.

Fillmore, C. J. (1977). Scenes-and-frames semantics. In A. Zampolli (Ed.), *Linguistic Structures Processing*, pp. 55–81. Amsterdam: North Holland.

Fillmore, C. J. (1982). Frame semantics. In The Linguistics Society of Korea (Ed.), *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 111–137. Seoul: Hanshin Publishing Company.

Fillmore, C. J. and B. T. Atkins (1992). Towards a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors. In A. Lehrer and E. F. Kittay (Eds.), *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*, pp. 75–102. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.

Gyoda, I. (1999). On the quotative construction in English: A minimalist account. *English Linguistics 16*(2), 275–302.

Haiman, J. (1983). Iconic and economic motivation. *Language 59*(4), 781–819.

Haspelmath, M. (2008). Frequency vs. iconicity in explaining grammatical asymmetries. *Cognitive Linguistics 19*(1), 1–33.

Levin, B. (1993). *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.